

令和二年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ ○○字で、または○○字以内で答えなさい、という問題は、「。」「や」「、」「かつこ」なども一字と数えます。

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【箱や机を作る職人をしていた亥之助が亡くなり、同居していた椅子職人の芳次郎の家で葬儀が執り行われた。】

亥之助の葬儀は、ひっそりと終えた。

弔問客の中には、どこでその死を知ったのか、亥之助のつくる和家具を贖^{ひいぎ}にしていたらしい高名な男達も何人かいて、狭い芳次郎の家には入りきれぬほどだったのだが、焼香をすませるとすぐに帰って行き、親類縁者が夜通し①ゴジンの思い出を語りあうこともなかった。芳次郎には、長い焼香の列が、職人が腕を競いあつた時代の終りを惜しんでいるようにさえ思えた。

それから間もない七月一日、※東京市は東京都となり、つづいてその翌月、ビルマの独立宣言が伝えられた。

日本軍はビルマでうまくやっていると、芳次郎は思った。それかあらぬか洋一郎の晶子に宛てた葉書には、水かけ祭の水を日本兵にかけるビルマの女性と子供や、露店の床屋で髭をそってもらう日本兵の姿が描かれている。おしゃれをしろとゆう子に金を送ってきたり、よちよち歩きの晶子を泣かせる近所の悪童に、「オチサンハ、オコルトコハイゾ」などと書いてきたり、洋一郎の便りは、よくこれで検閲が通つたと思うほど平和だった。

が、芳次郎の仕事は、ほとんどなくなつた。稀に修理の仕事があつても、材木を手に入れるのに苦労する。ひらさわの主人は店仕舞いを考えていると言ひ、それを聞いたゆう子は、近所のラジオ屋から内職をもらつてきた。

芳次郎の仕事は、配給の玄米を一升壺に入れ、はたきの柄について米を白くすることと、ふみとゆう子が買い出しに出かけたあとの晶子の子守の二つになった。思ひ出すまいとしても、芳次郎の脳裡には、亥之助の腕を惜しんで集まつた人達の長い焼香の列が浮かんた。芳次郎が逝く頃には、腕を惜しんで集まつてくれる人すらいなくなつていくかもしれない。

ひさしぶりに鉋を持つたのは、ゆう子にかぼちゃと茄子を植える木箱をつくってもらいたいと頼まれた時だった。食糧不足を少しでも解消しようと、東京では昭和通りの植樹帯が、神奈川県ではゴルフ場がタガヤされて、茄子や豆、芋などが栽培されていたが、そんな菜園を自分の家の前にもつくりたいと言ひのである。

芳次郎は、残つていた板を集めて木箱をつくつた。土が入ればいい箱だとわかつてはいるのだが、気がつくとも、板の厚みを揃え、底にあける穴の

位置を慎重にきめていた。

「お店に納めるような木箱をつくるつもり？」

と、ふみは笑つた。むつとして外へ出たが、考えてみれば、ふみがわるいわけではなかった。

雨さらしになる木箱をつくるのに、名人の腕は必要ないのである。板も、ねじれていようが節だらけであろうが、厚みがあつて頑丈ならはい。

①芳次郎は、自分の腕を眺めた。椅子をつくらせたら当代一と言われた腕は、箱の中へ入れる土を芝公園から無断で集めていた。

ゆう子は誰に教わつたのか、土の中に食べ物のごみを埋め、やはり公園から集めてきた落葉をその上にまいた。土を肥やしてから、苗を植えるつもりだった。

ゆう子が木箱菜園の土壌づくりにはげんでいる頃に、米国は、B 29という新型爆撃機を開発したと発表した。新型爆撃機は、対日空襲に使用されるという。すでに同盟国のイタリアが無条件降伏し、本土決戦の声も聞かれるようになっていた。

【中略】

東京に不気味なサイレンが響いたのは、十一月一日だった。マリアナ群島を基地としたB 29が来襲したのである。以来、B 29はしばしば東京の上空を侵し、二十四日夜には、二時間にわたって焼夷弾や爆弾を落として行つた。

ゆう子が、成田へ行こうと言ひ出した。

芳次郎はかぶりを振つた。材木がなくなつても、仕事を離れる気はモウトウなかった。

「疎開して下さいよ」

ゆう子は、うらめしげに芳次郎を見た。

「あたし達が空襲で死んじやっていたら、洋ちゃんが帰つてきた時にどうするんですか」

洋一郎が帰ってくるには、芳次郎の命をひきかえにしなければならぬ。それは芳次郎の信念のようになつていた。それには、洋一郎の戦死より先に、芳次郎が空襲で命を失わねばならぬのである。

二十七日夜、B 29が再度来襲した時、芳次郎は、女達三人を隣りの防空壕へ追い出して、自分は電燈を消し、※燈火管制用の黒い幕を引いて、探照燈の光すら入つてこない真暗闇の仕事場に坐つていた。誰へ向つてかわからないが、「ざまあみろ」と言つてやりたい気分だった。

飛行機の爆音が響き、近くに落ちたらしい爆弾で家が揺れた。小学校の地下室へ避難するらしい人達の足音と、そっちはだめだと叫ぶ男の声が入り混じって聞えてきた。

隣りの防空壕からゆう子が抜け出してきたのは、明け方近く、空襲警報がまだ解除とならない時だった。ゆう子は、探照燈の光を頼りに仕事場へ入ってきて、懐中電燈をつけた。

「怒られるぞ」

と芳次郎が言うと、ゆう子は首をすくめて笑った。

「忘れものをしちゃったの」

「何を忘れたんだ」

「大事なもの」

ゆう子は懐中電燈の明りを軀で隠すようにして二階へ上がって行った。

戻ってきた手許を見ると、三寸近い厚みのものを晶子の洋服でくるんでいた。

「何だい、それは」

ゆう子は、黙って懐中電燈の明りを当ててみせた。ボール紙のようなものが見えた。

芳次郎は顔を近づけた。一番上のボール紙に、振袖を着ている女の子の絵が描かれていた。洋一郎からの葉書であった。

「これならリュックサックの中に入るから」

黙っている芳次郎に、ゆう子は言訳をするような口調で言った。

「お義父さんも防空壕へ行ってくれると嬉しいんだけどな」

「いやだよ。爆弾が命中すりゃ、防空壕にいたって仕事場にいたっておんじだ」

「でも、それなら一家揃って……」

「洋一郎が帰ってきた時に、みんな死んじまっていたら困ると言ったのはお前だろ」

ゆう子は、声を出さずに笑ったようだった。

だが、B 29 の空襲はつづいた。

十一月三十日の夜も、寝入りばなをサイレンの音で起こされた。満三歳にならぬ晶子までが、すぐに目を覚まし、泣きもせず小さなもんぺへ手を伸ばすのは、見ていて感心するほどだった。

ゆう子は、晶子をふみにあずけて隣りの防空壕へ行かせ、自分は芳次郎の前に坐った。芳次郎が避難すると言うまで、梃子でも動かぬつもりらしかった。

「葉書は避難させたか」

と、芳次郎は言った。

「晶子のリュックサックに入れました」

黒い幕の引き方がぞんざいだったのか、探照燈の光がとぎれとぎれに家の中へ入ってきた。青白い光に、ただでさえ血色のよくないゆう子は、よけい蒼ざめて見えた。

「椅子は、リュックサックにや入らねえからなあ」

芳次郎は、口をついて出た自分の言葉にうろたえた。そんなことを言う気はなかった筈だった。

が、言ってしまったあとで、道具屋が二ソクサンモンで買ったという亥之助の硯箱が脳裡に浮かんだ。亥之助の硯箱も針箱も、持って逃げるには大き過ぎた。

俺の椅子も、※ 亥之助の親方の硯箱や針箱も、葉書のように持ち出してはもらえない。空襲があれば燃える。

※ 椅子芳の、三代亥之助のと言われていたところで、それがいったい何だったのだろう。

「あたしね、お父つあんが葺いた瓦屋根を、今でも覚えてるんですよ」

(2) 芳次郎の胸のうちを見透かしたように、ゆう子が口を開いた。

「あたしのうちですけど。大風が吹いて、隣りのうちの瓦は落ちたのに、うちの屋根は何ともなくってね、あたし、すごく嬉しかった」

「よかったな」

芳次郎は、素気ない口調で言った。ゆう子の顔を、また幕の隙間からの探照燈が照らした。

「あの、たとえばね、どこかの娘さんがおっ母さんを思い出すとするでしょう？ で、そのおっ母さんがお針の上手な人だったら、針箱も一緒に目の前に浮かぶと思いませんか？」

③ ゆう子の言いたいことがわかってきた。

瓦屋根も針箱も椅子も、葉書のようにには持ち出せない。高価な絵画や陶器のように、保管されもしないだろう。が、針箱はいつも母の膝許にあったものとして、椅子は、父がゆったりと寄りかかっていたものとして、いつまでも子供たちの脳裡にやきついていてるのではないか。

「うちのお父つあん瓦屋根だつて、もしかしたら、東京中で、あの屋根があたしのうちと思われているかもしれない」
坐りやすいと父親が愛用していた椅子を、その子が『父の椅子』として懐かしく思い出してくれるとしたら、それこそ職人冥利につきる。

「ちよつと、何してるのよ」

金切り声が聞こえた。ふみの声だった。

「焼夷弾を落とされて、すぐそこまで燃えてきてるのよ」

はじかれたように、ゆう子が立ち上がった。幕を寄せて、窓を開ける。探照燈の炎が舞い赤い空が、目の中へ飛び込んできた。

「お義母さんこそ、何やってるの。早く晶子を連れて、防空壕へ飛び込んで」

芳次郎は、晶子を見るつもりで立ち上がった。が、目は空に吸い寄せられた。

赤い空に、それよりもさらに赤く光る火の粉が降っていた。焼夷弾だった。それは、異様に美しい光景であった。焼夷弾は、火花が散ってゆくように、神明宮の木立や赤十字病院の屋根に降りかかっていた。

「学校はもう、あぶないわ」

ゆう子は手早く窓を閉めた。

「お義父さん、駅へ逃げますよ。それから成田へ疎開します。洋ちゃんが戦地であぶない目に遭つてるかもしれないのに、こつちで命を粗末にしたら罰が当るわ」

ゆう子の手が芳次郎の手をとった。一緒に逃げることにきめながら、芳次郎はどこかで、ここで助かつては、
1 へ足を踏み入れてしま
うような気がしていた。

(北原亞以子『こはだの鮎』所収「十一月の花火」より)

※東京市……東京市が東京都になったのは一九四三年のことである。

※燈火管制……夜、空襲などに備えて照明を制限すること。

※変亥之の親方……亥之助のこと。あとの「三代亥之」も同じく亥之助を指す。

※椅子芳……椅子職人としての芳次郎を指す。

問一 —— 線①～④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二 —— 線(1)「芳次郎は、自分の腕を眺めた」とありますが、この場面における芳次郎の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 屋外での使用に耐える木箱を作るだけなのに気づけばきれいに作ろうとしており、そのことを嘲笑してきたふみを苦々しく思ったが、美しさと実用性を兼ね備えたものを作るだけの技術はあると思いつつ、いつのまにか目的を忘れていた自分を恥ずかしく思っている。

イ 用を足せばよい木箱なのに無意識のうちに丁寧^{ていねい}に作るうとしており、そのことを笑いながら指摘したふみに対して苛立ちを覚えたが、並ぶものはいないと評された自身の技術を発揮できず、生活に直結したことにしか力を注がない現実に思いを巡らせている。

ウ 丈夫で使えればよい品物を作るだけなのに見た目への思いも捨てきれず、そのことを見抜いて笑いながら注意してきたふみを腹立たしく思ったが、自分の腕に自信を持ちつつも、精巧な作品が求められるような時代ではないという事実をどうにか受けいれようと考えている。

エ 仕事が少ない中で自分の腕を生かす格好の場に意気込んでおり、そのことをまったく理解しないふみを不快に思ったが、名人と呼ばれるだけの腕を持っているという自信はありつつも、それを生かす場が無ければ何の意味もない事実に直面して悲しく思っている。

オ 実用的であればよい木箱なのに美しいものに仕上げようとしており、そのことをおもしろおかしく指摘したふみに対して憤慨したが、衰えることのない自分の技術力を誇りに思いつつも、戦況の悪化によって仕事が減っているという現実を不安に思っている。

問三 — 線(2)「芳次郎の胸のうち」とありますが、そこにはどのような気持ちがあったと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分で持ち出せなかった作品が燃えてしまったという現実に対して、自分の気持ちを表明したところで何も変わらないとわかっていても、声に出さずにはいられないことに対してやるせない思っている。

イ 世間の人々から名人と褒め称えられていた実績があったとしても、戦争中に人々の記憶に残るような椅子を作れたとしても、今ではもはや何の役にも立たないことに対して歯がゆさを感じている。

ウ 自分では持ち出せない椅子は爆撃で燃えてしまうという現実に対して、その現実を完全には受け入れられていなかったことに気づき、過去に名声を得ていても今となつては意味がないとむなしさを感じている。

エ いくら時間をかけて優れた作品を作ったとしても、安全なところへ作品を持ち運ぶことができなかったら、ひとたび空襲を受ければその労力もすべて無駄になってしまうことに対して切なく思っている。

オ 仮に自分の作品を運び出すことができたとしても、空襲があらゆるものを即座に破壊してしまうのであれば、どこでどう過ごそうが結果は変わらないと諦めている。

問四 — 線(3)「ゆう子の言いたいこと」とありますが、それはどのような内容ですか。四十一字以上五十字以内で説明しなさい。

問五 1 に入る表現として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 反りの合わせぬ時代 イ 第一線に立てぬ時代 ウ 職人冥利につきる時代 エ 明日をも知れぬ時代 オ 戦乱極まる時代

問六 本文に登場する「芳次郎」「洋一郎」「晶子」「ゆう子」「ふみ」について、例のように、婚姻関係にあるときは二重線、親子関係にあるときは一重線を用いて、本文から読み取れるそれぞれの関係を図で示しなさい。なお、登場人物はすべて婚姻関係、親子関係で説明ができます。

例 AとBが婚姻関係にあり、AとBの子どもがCの場合

B
├──┤
A C

問七 次のア～オは、この作品を読んだ生徒たちの発言です。作品の解釈として明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 亥之助の葬儀の話から始まるこの場面は、「死」に「時代の終わり」が暗示されていると考えられます。それが芳次郎を含めた職人、戦争へとつながっていきます。芳次郎は家族と疎開することになりそうですが、このあとどうなっていくかが気がかりです。

イ 緩急のつけた表現に特徴があると思いました。「本土決戦の声」など戦争が確実に忍び寄ってくる表現に緊迫感を感じつつも、洋一郎の手紙で描かれる平和な様子や、公園から持ってきた土や落葉から家庭菜園を始めようとするなど、日常的な空気も感じられます。

ウ 芳次郎の職人としての気質が印象に残りました。仕事や仲間が減っていく中で、生きにくさを感じつつも、いざ鉋を手にしたときには無意識に職人の姿になっています。職人が求められていた時代と、戦争の時代、それぞれの時間が対照的だと感じました。

エ 洋一郎は手紙の内容から、どこかユーモアがあつて気遣いができる人物だとわかります。戦火が迫り、それに伴い人々も苦しい生活を余儀なくされるという点では、とても重い内容の中で、洋一郎のユーモラスな姿が印象に残りました。

オ 洋一郎の死は残念ですが、家族の愛に胸を打たれました。戦時中の検閲も気にせず、手紙を通して家族への気遣いをみせ、家族がその手紙を大切にしている様子からも、家族の強い絆と愛を読み取ることができます。

同一不変なものを基軸^{きじく}にして、人は変転と差異にみちた現象世界を理解しようとする。しかるに、同一不変性として二つの基本的カテゴリーが考えられる。人がものごとを理解するとき、その基本的なパターンは「何」が「どのように」あるかという形であろう。「何」を基軸にしてもの^{もの}ことをなめることで、現象の多様性が単一のモノにまとめて認識^{にんしき}される。程度の差はあっても、モノは概^{がい}して安定している。一本の庭木は苗木^{なえぎ}から大木に成長し、季節とともにさまざまな姿を現すが、一本の木としての同一性を保持するものとして人は見ている。流れる雲の姿は変転きわまりないが、それは異なった雲が入れかわり立ちかわり現れるのではなくて、同一の雲が時々刻々その姿を変えているのだと見ている。私もまた自分が生まれてこのかた同一の人間であり続けたと思っている。成長する樹木や流れる雲や私という人間のいずれにおいても、それらが同一不変の基底をもっていることが超^{ちやうえつ}越的に保障されているだろうか。決してそうではないだろう。ただそのように見ることで混沌^{こんとん}の世界に秩序^{ちつじよ}が導入され、それが理解可能なものになるのである。①モノの同一不変性にもとづいたこのような世界把握の様式を以下では主語的統一とよぶことにしよう。ヘレン・ケラーが、掌^{てのひら}に綴^{つづ}られた「WATER」の一単語によって水があたえるさまざまな感覚をはじめて統合しえたときの驚^{おどろ}きと歎^{なげ}びは、しばしば語られる感動的なエピソードであるが、それは主語的な統合の重要性をこの上なく雄弁^{ゆうべん}に物語っている。しかし、私たち成人においては、主語的な統一はほとんど情性^{せいせい}化^{けいけい}されており、ほぼ決まりきった仕方^{かた}で世界が眺^{なが}められている。それは安定した世界であるが退屈^{たいくつ}でもある。このような世界にインパクトがあるとすれば、それは新しい普遍的なモノが見出されたときであろう。

一方、「どのように」を基軸に現象世界を見ることもできる。これはモノとその属性との間の主従関係を逆転して、さまざまな異なったモノが同一の状態に「於^おいてある」と見る見方である。夕陽^{ゆうひ}もバラの花弁^{はな}も炎^{ほのお}もすべて赤いという状態に於いてある。「赤い」という性質が一つの場所を作っていて、そこに夕陽やバラや炎が②ツツみ込まれるというイメージである。個物が互^{たが}いにバラバラではなく、さまざまなつながりをもってこの世界を構成していることが知られるのはこのような見方、つまり述語的統一によっている。述語的統一においても、通常私たちは情性的なものの見方しかしていない。しかし、思いがけない述語的統一が導入されると、それによって個物間の関係が一新され、そこに新鮮な世界像^{しんせん}が現れる。そこではモノとして新しい何かが見出される必要はまったくない。後に述べるように、「新しい自然学」の斬新^{ざんしん}さは、③この事実を自覚的に追求するところにあるのではないかと私は思っている。

当然のことながら、これら④統合パターンの二本の柱のいずれが欠けても、私たちは正常に生きていくことができない。しかし、民族や文化圏^{けん}によつていずれかのパターンが優位になることはありうる。西欧文明において主語的統一が優位であるのに対して、日本は伝統的に述語的統一が優位な文化を発達させてきた、という趣旨^{しゆし}のことがしばしば言われる。たとえば、いわゆる時枝文法^{ときえだ}によつて明らかにされた日本語特有の言語構造からもそのような主張がなされている。自然科学的認識というものにしても、私たちの日常的認識のある側面が強調され⑤ヒダイ化したものと見ることができよう。だとすれば、科学的自然認識においても上記の二本柱は不可欠である。しかし、現代自然科学が主語的統一を文化的基調とする西欧世界に起源をもつことから、いきおい主語を基軸とする自然理解の様式がそこでは優位になったのではないかと考えられなくだろうか。歴史的にも、近代科学成立の経緯^{けいゐ}が近代的自我^{じが}の確立と切り離^{はな}しがたく結びついていることからそのように考えるのがごく自然に思われる。もちろん、ここでは確たる根拠^{こんきよ}があつてそのように主張しているわけではない。それに、科学も時代とともに変質する。実際、科学に対する従来の固^こ定的なイメージとは少々異なつた、いわば述語的統一の色合いの濃い科学が西欧起源の科学の中にすでに興^{おこ}りつつある。あるいは、複雑世界の科学的描写^{びやうしや}を試みるならば、④科学は必然的にそのように性格を変えざるをえないのではないかと思われる。ともあれ、混沌の世界を分節化^{ぶんせつか}するための基本的な軸として、私は主語的統一と述語的統一を互いに同資格をもつものと考えたい。一方が極度に他方に従属すれば、それは人間の生にとつて深刻な事態を引き起こすであろう。

ところで、主語的統一とか述語的統一とか言つても、それらは世界の分節化^{ぶんせつか}一般に関わることであつて、科学的認識に固有のことではない。したがつて、知ること一般の中で⑤「科学的に知る」ことの位置をまず見定めておくことが必要であろう。その上で主語・述語的統一の観点に立ち戻れば、論点がいっそう明瞭^{めいりやう}になるだろう。

言うまでもなく、科学的に知ることとは「知ること」全体の中の一部でしかない。そもそも、科学的知識であるからには明確な言語で表現される必要があるが、一方では言語化することにはなだ困難な、しかしそれなしでは人間がとうてい生きられないような重要な知識がある。M・ポラニーが「暗黙知^{あんもくち}」とよぶものはこのような知を代表している。久しく会わなかった知人の顔を見て、直ちにその人とわかる。しかし、どうしてそのように判断できたかと問われても説明できない。「知っているから知っているのだ」としか答えられない。そのような判断は顔を構成する細部の知識に依拠^{いきよ}していることは確かだが、それだけでは決定的に足りない何かがある。その表現しがたい「何か」が暗黙知である。③ジユクレンした医師が画像からの確な診断を下す場合や、石工や大工など職人の名人芸においても、暗黙知は絶大な働きを示すであろう。さまざまな技芸やス

ポーツにおいても、細部の筋肉の動きがどのように見事に統合されるのかについて、人はほとんど無知でありながらその体は「知っている」。市川浩の身体論における「身わけ」もこのような暗黙の知と重なることが多いと思われる。頭は知らないが無意識や体はちゃんと知っている、というような知識に支えられて人は四六時中生きている。「知ること」の圧倒的な部分が暗黙的な知識かもしれない。

しかし、非言語的な知識というものを安易に考えすぎないようにしたい。実際、言語をまったく超えた知識というものが考えられるのかどうか私は知らない。言語的に表現される知識にしたところで、それがもつ意味は大なり小なり暗黙の了解を前提としているのではなからうか。言語というものからして、その意味を言語そのものによつて説明しつくすことはできないだろう。最終的にはその意味が暗黙的にしか了解されないのが言語というものではないだろうか。たとえば、「痛い」という言葉の意味を私たちは直ちに了解するが、それはこの言葉をいろいろな文脈のなかで、さまざまな人たちとの間でこれまで何千回となく使ってきた、そのような経験を通じて社会的に形成された意味がそこに込められているからではないだろうか。では、その意味とは一体何かと問われても説明のしようがない。顔を見てたどころに誰であるかがわかるということ、「痛い」という言葉を耳にしてたどころにその意味を了解するということが本質的に同じであるとは言わないまでも、そこに説明を超えた直接の了解がなければならぬという点で共通性があると言えないだろうか。

科学的言明のユニークさは、その意味するところが完全に一義的ではないにしても、不確定性の幅がきわめて小さいことであろう。科学用語の意味は、たとえ文脈依存的であるとしてもまずあいまいさがなく、そのような言葉が誰にとつても同一の意味内容をもつ論理の規則に則って配列される。どのような状況においても、科学的言明がひどく違った意味に受け取られることはまずない。というよりこの条件を満たさない言明を科学的言明とは普通よばない。

風景を描くの色彩を一切排除した水墨画もあり、曲線や直線のみで描く線画もあり、塗りつぶされた面の集合によつて描く場合もある。科学的描写もこれらに似た経験事実の描き方の一つである。路傍の小石を科学的に描くとすれば、その手触りや微妙な色彩やそれが引き起こすさまざまなイメージ等はひとまず脇に置いて、たとえば小石の重量や物質成分や、投げられた小石ならばその空間的位置に記述を絞るであろう。あるいは小石の地質学的歴史が刻まれた縞状のモヨウに注目するかもしれない。これらの諸性質は、程度の差はあれ誰にとつてもほぼ共通な意味をもつ言葉で記述できるはずだからである。現実の科学描写において用いられる言葉は、観察言語にせよそれらを組み立てる理論言語にせよ、さまざまな度合いで意味の幅を許容している。それでも日常言語に比べると、それらの意味ははるかに限定的である。日常場面では「ゆっくり」や「あたたか」は誰にとつても明瞭な意味をもっているが、物理学の用語として用いるときには、それ以上の限定なしには済まない。⁽⁶⁾ 科学言語に

よる表現が舞台をくつきりと照らし出すスポットライトに喩えられるならば、日常言語による表現はさしずめ暗夜の道をぼんやり照らす街灯と見えようか。

(蔵本由紀『新しい自然科学 非線形科学の可能性』より)

※情性化……習慣化のこと。

※時枝文法……国語学者である時枝誠記が研究した日本語の文法。

問一——線①④のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二——線(1)「モノの同一不変性にもとづいたこのような世界把握の様式」とありますが、それはどのようなものですか。六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問三——線(2)「この事実」とありますが、それはどのような事実ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 異なる状態や属性にある個物同士も、互いにバラバラではなく、実際には密接なつながりをもつてこの世界を構築しているという事実。
イ 思いがけない述語的統一を導入することができれば、新しいモノを発見しなくても安定的な世界を理解することができるという事実。
ウ 述語的統合パターンが欠けてしまうと、主語的統合パターンを持つていても、人間は正常に生きていくことができなくなるという事実。
エ 異なるモノのつながりに注目して世界を見ると、多様なモノ同士の共通性が分かり、新しい世界像を描くことができるという事実。
オ 伝統的な縦割りの学問体系の下で、個別にそれぞれの分野を深めていくと、情性化された世界を絶えず更新することができるという事実。

問四 — 線(3)「統合パターンの二本の柱」とありますが、この「二本の柱」とは、「主語的統一」と「述語的統一」のことを指しています。次の例から、「主語的統一による認識」にあたるものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 蛍の大集団が同時に明滅する現象や、複数のコオロギが声をそろえて鳴く現象を分析して、リズムについて考えること。
イ スズキは成長する前にセイゴなどと呼ばれるが、成長とともに名称が変わっても魚の種類としては同じだと考えること。
ウ カラスが夕刻にねぐらへ帰ることと、渡り鳥が決まった時期に決まった方角へ飛んでいくことに、体内時計の機能について考えること。
エ くし切りにしたリングや、ウサギの形に飾り切りしたリング、芯を抜いて輪切りにしたリングを、すべてリングだと考えること。
オ ミミズやカタツムリ、ヒルなどの生き物を観察して、足のない生き物がどのようにして地上を移動するのか考えること。

問五 — 線(4)「科学は必然的にそのように性格を変えざるをえないのではないかと思われる」とありますが、「科学」が「性格を変えざるをえない」と言えるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現代の科学には主語的統一と述語的統一の二本の柱が必要不可欠であり、この二つの軸がバランスを崩してしまうと複雑世界の科学的描写が困難になるから。

イ 時代とともに従来とは違う述語的統一の色濃い科学が興りつつあり、このまま主語を基軸とする自然理解の様式を続けていると複雑世界の科学的描写は困難だから。

ウ 新しい科学の成立には近代的自我の確立が前提になければならないので、このまま主語を基軸とする自然理解の様式を続けていると複雑世界の科学的描写は困難だから。

エ 西欧に起源をもつ現代自然科学では主語を基軸とする自然理解の様式が優位なので、述語的統一の色濃い科学が導入されれば複雑世界の科学的描写が困難になるから。

オ 日本の科学的認識では伝統的に述語を基軸とする自然理解の様式が優位なので、このまま主語を基軸とする自然理解の様式を導入しなければ複雑世界の科学的描写は困難だから。

問六 — 線(5)「『科学的に知る』」とありますが、それはどのようなことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

い。

ア 言語化できない暗黙的な了解を前提とし、より確実性の高い明確な言語を用いて論理的に現象を認識すること。

イ 暗黙的に知ることの意味を尊重しながら、言語的説明を超えた直接の了解にもとづいて正確に現象を意味づけること。

ウ 暗黙的にしか了解されない現象を対象として、誰にでもわかるような共通の言語を用いて本質的に現象を理解すること。

エ 知ることの大半を占める暗黙的な知の存在について、不確定性の幅が小さい言語を論理の規則通りに並べることで証明すること。

オ 言語的に表現できない暗黙的な知識には頼ることなく、誰にでも共通して理解できる正確な言語を選んで現象を説明すること。

問七 — 線(6)「科学言語による表現が舞台をくつきりと照らし出すスポットライトに喩えられるならば、日常言語による表現はさしずめ暗夜の道をぼんやり照らす街灯と言えようか」とありますが、それはどういうことですか。「スポットライト」と「街灯」という比喻の違いがわかるように、五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 本文の筆者の主張として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 混沌とした世界を科学的に知るための基本的なものの見方の軸である主語的統一と述語的統一とは、互いに同等であってはならない。
イ 科学言語は多くが日常語にルーツを持ち、無意識的な了解や連想を誘発するが、こうした特性は述語的な世界把握に役立つものである。
ウ 科学的言語による記述が、日常言語による記述よりも普遍的な側面があることから、科学言語は日常言語よりも優れた言語である。
エ 分析を重ねて複雑世界を構成する基本要素を探り当て、混沌とした世界に秩序を導入することこそが新しい科学のあり方である。
オ 複雑世界に対して新しい世界像を開示するためには、異分野であっても既成概念にとらわれずに結びつける姿勢こそが必要である。

(問題は以上です)

受験番号			
			番
氏 名			

合計得点

一
問一
①
②
されて
③
④

問二

問三

問四
41
50
40

問五

問六

問七

--

二
問一
①
み
②
③
④

問二
61
70
60

問三

問四

問五

問六

問七
50
51
60

問八

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※